

戦争の経済学

アラン・レイノルズ(カトー研究所の上級研究員)

CATO 研究所ホームページ(2003年3月31日)

http://www.cato.org/research/articles/reynolds_021121.html

島岡光一訳

私は、イラクとの戦いを始めるコストについてしばしば尋ねられる。--納税者へのコストばかりでなくて、経済、原油価格、株式市場などへの潜在的な衝撃などだ。

私たちは、最初に国連の査察が全面的な戦争を防ぐか、防がないかという見込みを評価したのち初めて、そのような質問にやっと答え始めることができる。

その後で、私たちは、どんな戦争であれ、それが短期的なものかそれとも長期化するかに関する事情通の見解を獲得するように努めなければならない。

米国の侵略を切望している人々は互いにあまり整合性のない議論をやっている。彼らは、イラクの「大量破壊兵器」にかんする争う余地のない情報をえることを要求する。しかし、彼らは同じ程度に、これらの兵器を見つけることが恐らく不可能になるので査察は失敗するだろうと確信している。

兵器および工場を見つけることがきわめて不可能な場合、私たちはどうやってそれらが存在していることを確かめられるのだろうか?

戦争をやりたくてしょうがないものたちは、イラクが大量破壊兵器を獲得する前に大急ぎで侵略しなければならないと、いう。こうして非難の矛先を、戦争勢力はサダムが現にもっている兵器から彼がかつて持ちたいものだと思っていた兵器へと変更しているのである。

しかし、それは、イラクがまず第1にイラク侵略を正当化することにしてきた多くの危険な兵器を、まだイラクが持っていないと認めることと等しいのだ--ガス、細菌、核兵器および(より重要なことには)米国の土地にそれらを運搬する手段などである。査察はサダムに「時間を稼がせ」やしないのである。

彼は、地上査察官および彼の肩越しにのぞき込む空中衛星写真のために、武器プログラムを始めなかったか、あるいは拡張することができなかったのだ。

イラクがものすごい兵器の恐ろしい兵器製造所を持っていると確信すると主張する人々は、それらの兵器が米軍にとってのなんら脅威とならないという不可解な確信を表明していることにもなるのであります。

彼らは、侵略が速やかでかつ容易なものになると宣言している。「それが10日以内に終わることを私が保証すると」とU.S.Newsのモルト・ツッカーマンは言っている。イラクが弱い兵力しかもたないという保証は、戦争をやる論理的基礎と矛盾する--すなわちイラクがおそるべき兵器を所有しているという主張がそれである。イラクは危険な略奪者あるか

もしれないし、あるいは楽な餌食かもしれない。しかし、それは両方でありえない。

米軍への危険を最小限にしながら同時に言うところのサダムの兵器の危険性を最大限にすることは、無理があるように見える。国際戦略研究所から「イラクの大量破壊兵器」やビル・フリスト上院議員(テネシー州選出)の「一刻一刻計算するとき」を読んでも、私の理解によれば、化学的テロおよび生物学的テロから来る危険の国内の確率の方が、例えば、2人の狙撃兵からの危険の確率より小さいということになってしまう。

イラクが、はるばるアメリカまできわめて多量のガスあるいは細菌を運ぶ方法はどんなものであれ、持っていることはありそうもないが、彼がやって来る米軍の侵略に対して持てるすべてを使用してよいことの方がもっと正当性があるわけだ。

私の最良の推測でも、戦争およびその影響が楽天主義者が認めるより高価でより困難だろう。それが1000億ドルから2000億ドルかかるだろうと大統領顧問ラリー・リンゼーが公的に推測している事実は、政府が第2のイラクの戦争が第1の戦争よりも、2倍あるいは3倍も困難になることを予測していることを意味している。

デフレに関する最近の見込みがあるうとも、戦争は常にインフレである。労働と財貨が軍用に転換されるので、金銭はより少数の品物を追い求めることになる。ビジネス・コストを押し上げ、かつ利益を圧縮する。卸売物価は、1915年から1920年まで122パーセント上昇し、1945年から1948年まで52パーセント上昇した。しかし、私たちはそのような恐ろしい規模のことについて、いま話しているのではない。1990年のときのように、イラクへの侵略のニュースは金属および他の軍需品の価格の投機的な、そして、恐らく暫時的な上昇を刺激するだろう。しかし、連邦準備局がそれを持続的なインフレと思うならば大間違いになるだろう。

イラクがクウェートに侵略した後、2、3カ月で原油価格は2倍になった。1バーレルあたり40ドルに接近した。しかし、現在の状況は全く異なる。1990年には、イラクの石油だけでなくクウェートの石油に対する脅威もあった。また、ある大国がアメリカと対立していて、結局イラクの側を付くだろうというある懸念があった。1990と異なり、石油は今日すでに割高である。とういのは、(1)石油市場は、既に戦争の本質的な危険はすでに織り込み済みであり、また、(2)ポスト-1991「制裁」は、イラク人をサダムにますます依存するようにしている一方で、世界石油供給を縮小させているからである。1991年には、原油価格が低下した。また、アメリカがイラクを攻撃した時、株は反発した。しかし、それはクウェートからイラクを追い出したことが世界石油供給への危険を減退させたからだ。今日のイラクに対する攻撃は反対の効果があるだろう。

S&P株価指数は、1941年から1952年まで(それは第二次世界大戦から朝鮮戦争の間に相当)、ほぼ12パーセント下落した。しかし恐らく今日、防衛産業株さえ低迷しているので、比較的短い戦争の危険も株式市場の問題のわずかの部分しか説明しない。他方では、テロの危険は企業投資に麻痺させる効果がある。

恐らく、イラクとの戦いの最も大きな危険性は、アルカイダと戦うことからサダムと戦

うことへ、および国内の安全から外交問題へと、国のセキュリティ資源を転換させるだろうということである。大使L.ポール・ブレイマー III(テロリズムに関する国立委員会の委員長)は、「私はトレードオフがあるという意見を買わない」とフォックス・ニュースに最近語った。しかし、トレードオフは意見の問題ではなく数学的な確実性である。

二つあるいは三つの課題に資源の100パーセントを同時に割当ててのに不可能である。一つのもの(イラク)により高い優先性を割り当てることは他のもの(アルカイダ)により低い優先事項を割り当てることと意味する。大統領は、例えば1週当たりだいたい60時間以上働くことができない。したがって、30時間を外国の戦争に、10時間を国内経済に割当てるとすると、国内の安全および他のすべてに20しか残らないことになる。「彼の地」の軍隊を増やせば「この地」の軍隊が少数になる。イラクを監視する諜報部員が増えれば増えるほど、アフガニスタンでタリバンの再起やアメリカの諸都市で問題をたくらむアルカイダ細胞を見張るものがますます少なくなるということである。

要するに、私たちがそれを解放と呼んでも、戦争は依然地獄だ。

また、任意の外国の戦争への努力、注意および資源の不可避な分散は、さらに国内テロを含む国内の問題のより大きな危険の増大を意味する。イラクとの戦いの見通しは他のいくつかの戦いほど地獄的ではない。しかし、それは必ずしも、また避けられないわけでもないのである。

時間は、多くの問題を解決する方法を持っている。また、時間だけが語るだろう。

この記事は、もとは2002年11月21日にCreators.comに書かれたものである。